



のびのび いきいき 生涯学習

生涯学習グループの紹介

現在、都留市内において各種団体に所属し、活動している学習グループや自主的に学習しているグループを紹介します。

思い立ったが吉日「都留詩友会 詩画展への取り組み」

詩画展と名付けた展示をはじめ十二年前がたちました。発足当時は、まだその様な展示会は全国的にも開催されていませんでした。「自作の詩に絵を添える」という程度に考えて、詩友会の会員に「詩画展」の話を切り出すと、「詩を作るだけでも大変なのに、さらに絵まで描くなんて」、「卒業以来、描いたこともない」としり込みして困惑した様子でした。

詩や絵が上手になってからといったら、死ぬまで何もできない。今できることを精一杯すればそれでいいと思う。

今になって思えば私が強引だったのか、会員が納得してくれたのか、とにかく、詩画展を実施することになりました。会員は知恵をしぼり、様々な手法で挑戦しました。「鯉のぼり」の詩には折り紙の鯉を貼り、「いきもの」の詩には、犬の写真を貼るなど工夫を凝らし、奮闘の末、いよいよ展示する日を迎えました。会員の家族も総動員で慣れない展示に力を貸してくれました。

展示作業が終了して、フットと一息入れて会場を見回したとき、「できない」、「描けない」の当初の消極的な思いは吹き飛んで、会員一同、言葉には出さないが「やった」という感激と興奮にのめり込んでいました。一人ひとりの作品のできばえがどうかと言うことではなく、会員全員で「詩画展」という一つのことを創り上げたという充実感が、個々の作品を乗り越えて遥か高い所にあつたのです。

芸道は、「道を極める」ことでありますが、創作は、「創りながら考え、考えながら創り深める」とことだと思えます。「詩画」とはどうあるべきか、今なお十二回を数えても試行錯誤の状態です。詩と絵を一体化した作品を創るということは、絵という表現手段を添えることによって詩のイメージを限定するという宿命があるからです。

新しいことに挑戦することは、苦勞も付きまとうが、人間をワクワクさせます。時間を忘れさせ、疲れを吹き飛ばし、集中没頭する境地は、味わってみなければ理解できないと思えます。また、作品ができ上がったときの充実感と解放感、これこそ生きていることを実感できる最高の瞬間だと思えます。

振り返れば、「上手」「下手」のプライドを捨て、今、自分の立っている位置で腰を切り、立ち上がったことで、十二回の「詩画展」を続けることができたと思えます。

何ごとも思い立ったが吉日だと思えます。詩友会では、多くの皆様のご入会をお待ちしています。

問合せ 都留詩友会 遠藤静江 ☎(43) 5914

心を描き、心を贈る「ひまわり会(絵手紙)」

「心」を込めて描いたものは、例え下手でも相手の心に響きます。上手にかこうと意識したものより、下手でも素直に取り組んだもののほうが個性も味わいもわいてくるものです。

絵を描くことは、先入観のない、子供のような無垢な目で実物を見つめると、大きさや形、色、一つひとつが微妙に違います。さらに実物を観察しながら描くと、ただ見ているだけではわからなかった細かな特徴にも気付いてまさに発見の連続、先入観や想像で描こうとしても、こうした発見や感動は得られません。私達は、こうした感動がさめないうちにこの人に贈ろうとの気持ちから忙しい時間を繰り合わせ、絵手紙教室に参加し会員相互の研鑽の場として明るく元気で楽しく学んでいます。

絵手紙の良いところは、「こう描かなければ」という決まりはありません。基本を心得ていれば、家で気軽に描けるものです。野菜、果物、身近な所にある全ての物が題材となるため気軽に楽しく描くことができ、行き詰まることはありません。

会員は、小学生を始め、多くの方が絵手紙教室に参加されています。今まで始めようと思っても、なかなかこうした教室に参加する機会がなくあきらめていた人が参加、勉強していくうちにめきめきと上手になり、昨年の都留市文化祭に出品し多くの観客に感動を与えたことでもますます意欲をわかし、絵手紙の素晴らしさを実感された方もあります。

私達ひまわり会では、毎月第一土曜日、午後一時から四時まで禾生コミュニケーションセンターでお互いの親睦を図り、励んでいます。皆さんも日常の生活にとり入れて気軽に参加してみませんか、入会をお待ちしています。

問合せ 小澤国雄 ☎(45) 1144



都留詩友会のみなさん



ひまわり会のみなさん